

下に出すべきではないのではあるまいか等の問題に就て注意して貰ひたい、二には作家の技巧に就いて考へると又其繪の上から現代の繪がいかに發達し來り、いかなる程度にあるか又いかに變遷しやうとしてゐるかを見て貰ひたい、三には盛に現はれる批評研究が果して研究賞鑒の道を盡くして居るかどうか、これ等は我々の學術的又教育的に注意すべき點であると考へるこれは色彩のみの點から見たのであるが他の點からも種々、展覽會から學ぶべきところがあるかと考へる云々

■一二の欠點は止むを得ない、二百人が一樣に期待した菅原先生の御講演のなかつた遺憾はあつたが、大体に於て豫期通りの結果を告げて會は終つた、會員は去つた、残された椅子とテーブルと花瓶と植木鉢とに、尙談話會の氣分が纏つて、外は秋の晴れ渡つた太陽が降りそそいでゐる、「いゝ文科會日和だつた」と誰かの云ふのが聞える、秋はいよいよ深くなり文科會の前途は遼遠である、切に會員諸姉の御自愛を祈る。

(T. N.)

蓮嶽晴雪

鹽谷宕陰

朝暾之前。暮霞之際。望岳於駿岡之西。突兀萬仞。芙蓉帶天。何處無是觀。唯瞻蒼蒼溪翠樾之表最佳。南至日。峰尖吞落日。殊爲絕奇。更思以朔旦冬至之歲審驗之。
(若巽廿勝小記)

回想錄

回顧 千葉安良

會長中川校長閣下 部長下田次郎先生、下村三四吉先生、岡田みつ子先生、垣内松三先生の周密な御指導御監督のもとに、文科住任關根正直先生を初め他諸先生方の直接間接の御薫陶御示教にあづかり、多數幹事諸氏の勵精會務を處理せられましたこと、全賛助員全會員諸姉の御援助御同情を蒙りましたことによりつて、茲に本會誌も第十號を發刊いたしましたこととなりましたのは、誠にめでたく有り難く存じます謹んで祝意を表しますとともに、上記のお方々並びに初號から六號に至る會計方兼編輯發行名義人であられた伊澤光雄氏、八號から引きつゞき現在の會計をあづかる、竹田みち氏に對して、深厚なる謝意を表するのであります。

四年になつたらあれもかうしよう。これもかうしよう、私共の一年二年三年の頃には、研學上修徳上の諸便宜に關することを始め、寄宿舎生活の諸難

事に至るまで、いろ／＼の改良意見を抱いて居つたものでした。そのもくろみの一つが、此の文科會誌をも産み出したのです。創刊當時の幹事は、その頃文科四年生であつた今小樽に居る河崎と、水戸に居る目良(舊姓關)とで、時の部長下田次郎先生と、櫻蔭會の主事を御務めになつて入らした岡田みつ子先生との一方ならぬ御盡力を受けて、すゝぶん心も苦しめ骨も折つて、會誌刊行の基礎を確實に造つて呉れたのでした。此の意味に於いて、私は重ねて、兩先生と此の二氏とに感謝の意を表するのであります。

初號發刊に際しての、中川會長からの御訓言は、「一時にして廢らぬやうに」「切り貼的にならぬやうに」「あまり専門的のものばかりに徧らず、一般的材料を研究するやうに」との三事に關してでありました。又下田部長からは、「此の會誌の客觀的價値は、學校の文科の實際があらまゝに投寫されるどころ學校の一部の側面史をなすところにあるが、主觀的價値は或意味に於いて 絶對無限に豊富である」といふことと、「在學生の活動とともに、卒業生の援助

を希望する」といふ意味の御言葉があり、喜多見生徒監からも「始ありて、終なしの轍を踏まぬやうに」「卒業生もつねに本會誌、本會の會合等に對して、後援を與へるやうに」と仰せられたのであります。それから又時の幹事は次のやうに期待して居りました。

○ある可かりし筈の文科に無かりし文科會々誌は當然の事として、今回發刊せらるゝ事に相なり候。會誌の期待する所は、一、卒業生と在校生とが相互の生活（思想感興）を取りかはしては經驗者と經驗者とが解し合ひ度、二、母校文科の現況を、其都度に纏めて卒業生の方には卒業後の母校を、顧瞻して戴き在校生には「吾等はコンナ中に居るのか」と自己の現環境を客觀視してそこに新なる意義を見出して貰ひ度、三、要するに母校を中心として、文科といふ色彩の許に卒業生と在校生との間に一種の空氣を造り度、四、其上に此誌上を利用して諸先生平生の御研究御感想の一端を伺ひ卒業在校の兩生の生活を豊富にし度き事に候。

今これ等の御訓言や期待から、第九號までの内容を檢して見ますと、「まだまだ不十分なことばかり

ある。思想もかなり有る。少しのばせば、世間のありふれた女流作家の作物よりも、はるかに優つたものをつくり出せる」と大層お悦び下さいましたし、又或る先生からは「會誌もいゝが、つまらない事を書くために、正課の勉強を眞面目にしないやうな風をつけられては困る。むやみと生徒の負擔を増すやうなことを始めないやうにしてもらひたい」といふ御言葉もございました、卒業後二ケ年半を過した今の私は、此の兩方の御言葉を、兩方とも眞面目に聞いていたゞきたいと、特に在校の會員方に御傳へする義務があるやうに存じます。又私ども同級生や、自分より一二年前に卒業された先輩など、會誌の話がでますと、今の方のは、歌でも文でも、ちがつていらつしやいますねえ、或點では非常な共鳴を感じますけれど、私達にはとてもかういふことを書いたり云つたり詠つたりすることのできる氣分になれませぬね」など、つくづくしみ／＼申し合ひます。そういふ私共はまた、私共より四五年前に御卒業の方々は、大層違つて居るのださうです。以上私としての回顧として書き列ねましたことに對しては、

である」といふ評價と、然し、とにかくその目的に添うて號を重ねて來た」といふ評價とが、與へられるのであらうと思ひます。私は第三號から第八號まで「部長は客員又は賛助員に、事務の一部を依囑することを得」といふ本會々則の適用によつて、編輯の御手傳ひを致して居りました。それ故、私に對して、會誌に就いての善惡の評をあからさまに聞かせて下さる篤志な方を多く持たなかつたのでありましたが、たゞ二つほど、當事者として責任ある私に深い印象を與へたことがあります。その一つは「どうせこんなもの、本氣になつて見て下さる方はありませんからね」といふさる友人の間はず語り」他の一つは「もう少し卒業生の實生活に役に立つやうな、内容のある權威のある研究や紹介を載せていたゞきたいと思つてゐます、よく私達が寄りますとね、文科會誌は、ほんの一部の會員の、自己發表の機關に過ぎない」といふ批評がでたりします、といふ先輩の深切な忠告註文であります。それから第九號が出ましてから後にも、或る先生は「こんどは非常によい。生徒の中にも、中々よく書けるのがあ

わざと辯明も評論も説明も致しません。御讀み下さる御方に、此の事實を提供して考へていたゞきます。これによつて、本誌の意味を認めていただき、努力していたゞき、正當に本誌の仕事を理解していただく一端ともなつたらばと思ふとばかりを申し上げます。

とにかく幸ひに相當の教育を受けました私共は、いつでも、いゝ氣になつて居ることは出來ないのであります。客觀的價値の少い自己の幻影を捉へて、自惚れて悦んでばかりは居られない者なのであります。私共はいつでも眞摯な態度を以て客觀的價値の多いものを作出し得るやうに、客觀的價値の多い働をするのであります。自己の把握せるあらゆる理想に居る者であります。自己の把握せるあらゆる理想に對して、自己の有する現在の一切が不十分であることを、常に認めて、七轉八起を繰り返して居るものであります、それ故。私は本誌に縁の深い者として、特に此の回顧を書くに當つて、慚愧の情に堪へぬものがあります。それは客觀的に見て、自分の本誌に對する努力の不十分であつたといふ點であり

ます。これは前々から常に思つてゐました。たゞ公私とも常に身に背負ひ切れぬほどの仕事を、自ら求めて持つて居る自分の不明を悲み、本誌に對しても、微力な自分の許すだけの力は賤いで参つたことを申して、御詫びを申し上げます、卒業生の義務的援助として、會費を正しく送附すること、價値ある研究報告などを投稿すること、これ等も全賛助員ども、誠に不十分であると、常に遺憾に思つて居ります。そしてそれが學校の側面史の一部として、卒業生のある一斷面の現状をよくあらはして居ることも、お互に深く考へねばならぬこと、思ひます。

「卒業して二三年も経つて御覽なさい」とは、卒業間近き頃、さる先生から、思想の内容の變化に就いての暗示として承つた御言葉であります。今も、初號を開いて見ますと、それから想起しました在校當時の精神生活と、今のそれとが比べられて、まことに無量の感があります。もとより粗野な精錬されないものではありましたが、實に彈力に富んだ活潑な理想的な思想に満たされて居た人々なのでした。今では、そのイラストレイクな、ヴァクタルな、アイ

デアリストレイクな思想が、もつと勉強しなくてはといふ一念をます／＼固くさせながらも、讀書にさへもます／＼遠ざからせるやうに、余儀なくさせられて居ます。その思想は今では丁度地殻に固くつゝ、まれた熔岩のやうに、心の中にたゞ高度の熱を保ち乍ら逼息して居る有様となつて居ます。當初の同人たちが皆さうなのです。私は、おとなとして、無限の未來を持つたをさな兒を祝福し、彼等をして出来るだけ樂しませ、できる丈け遊ばせてやりたいと思ふと同じ心に、在校の方々がその學生時代を、十分に生甲斐があると思ふ精神生活をなさるやうにと祈つて居ます。と同時に眞面目な學習を怠つて下さいますな、確實な學習が何よりもよい人格をつくり出すといふことも申し上げたいのであります。そして此の様な繰り言めいたことを言はないですむ元氣な方々によつて永久に經營せらるべき文科會誌の前途を祝福するのであります。

回顧はまた、私の持ち前の主觀の強い文になつてしまひました、悪しからず。(大三二、一一、一六)

氣がついて見ると、御たづねの事に、御答へしなければならぬ日は、今日でございました。すいぶん申わけのない事をしてしまつたものでございます。けれど地方に居て、心身の勞役に従つてゐる私達には、かういふ事に對して、かういふ結果を來すのが普通の事になつて居ります。まったく私達は一學期に一度文科會雜誌を頂きますと、ふと、世の中にかういふものが存在してゐたといふ事を思い起すといふやうな、生活をしてゐるのでございます。

これ位餘裕なく暮してゐる私達、これ位忘れっぽい私達がいく年も前の、而も感想といふやうなものを、憶えてゐるわけがございません。強いて申せば其の當時、私には此の雜誌の創刊されるわけがわかりませんでした、此の雜誌の帯びる使命といふやうなもの、わからなかつたのでございます。どういふ特色をもつて發展してゆくものか、其れも遂にわかりませんでした。其れ等に對する不満が、やがて此の

雜誌が創刊された當時の感想であつたと思ひます。其の他には、今更らに、私達の力の貧弱なものであることなどをしみ／＼思はせられたなどいふことでございます。

記念號などいへば御目出度いことでも申あげねばならぬのかもしれないけれど、とにかく、つむじのまがつた、御目出度くはおさまりきれぬ私の申あげることとはこんなとでございます。(稻葉 光)

四年前

昔の一年生

□氣がついて見るといつの間にか四年は過ぎて居たそして最後の試験もすんで了つた。毎年々々みんながかうした悲しみに打たれて現實界に入つてゆくといふ事が身に喰ひ入る様にしみ／＼と感ぜられる。そして四年前が夢の様になつかしく柔らかに追つて来る。

□それは櫻が花やかに咲いた春の日であつた、お茶の水の第一印象、美しく輝く花を見て夕日を見て若